

A 語句の意味と読み

- (1) 読み＝「まさニ～（ント）す」／意味＝今にも九十になろうとしている（もうすぐ九十だ）。／★「九十歳である」と訳すと×。一字を二度読む字
- (2) 「迂」＝遠回り・回り道であること。「懲り」＝（山にさえぎられて遠回りになる不便さに）苦しむ・悩む。（「うんざりする」も可）／「懲り」は現代語の「こりる（失敗して二度としない）」ではなく、「悩む・苦しむ」の意
- (3) つくして／力を出しきる・やりつくす。／「畢」＝終わる・つくす
- (4) すなはち／下の打消「能はず」と呼応して、「なんと…さえない」という強い否定を表す。※採点は、「打消（能はず）」と呼応して強い否定を表す」という内容が書けていれば可。／「そう」ではなく「すなはち」と読む
- (5) 知恵がないこと・愚かなこと。／「恵」は「慧（かしこい）」に通じる字
- (6) つきはてる・なくなる。「窮匱する無し」で「つきることがない」。／子孫が絶えない、という愚公の言い分につながる

B 句法

- (7) 再読文字。／ほかに未・将・当・応・宜・須・猶（由）・盍など
- (8) 疑問。「太行山や王屋山をどうしようというのですか」の意。「如__何」の間に対象をはさむ形（如＋太行・王屋＋何）。※妻の心配の強さを見て反語（どうにもできまい）と取る教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／このあと家の者が「渤海の尾に投ぜん」と実際に答えている
- (9) いづく（にか）／「どこに」という場所をたずねる言葉。／「いづクンゾ（どうして）」と読む用法と区別する
- (10) 詠嘆（感嘆）。述語を文頭に置いて強めた倒置の形。

／「～かな」が目印。智叟が愚公をあざける言葉

- (11) 逆接。「たとえ～であっても・～けれども」。ここは「たとえ私が死んでも」。／このあと「子の存する有り」と続く
- (12) 反語。「何（なん）ゾ～ざラン」の形で、文末が「ん」で結ばれる。形は疑問だが、意味は強い肯定。／直前の「子子孫孫窮匱する無きなり」「山は加増せず」を受けた、愚公の確信の言葉

C 主語・指す内容

- (13) 愚公の妻が、夫である愚公に向けて言った言葉。「君」は愚公を指す。／このあと「且つ焉にか土石を置かん」と続く
- (14) 北山の愚公。／言っているのは河曲の智叟
- (15) 愚公の、あきらめずに山を移し続けようとするひたむきな真心。／直前で山の神が「其の已まざる（やめないこと）」を帝に告げている
- (16) 使役。天帝は夸蛾氏の二人の子に命じて、二つの山を背負って運び去らせた。／「命ジテ～シム」＝～に命じて…させる。書き下しでは「しむ」を補う

D 口語訳

- (17) あなたの力では、（あの小さな）魁父の丘さえくずすことができません。／妻の言葉。「魁父の丘」が小さな丘であることを補って訳す
- (18) いったいその土や石をどうするとか、いや、どうにもできまい。／反語。裏の断定まで書ききる
- (19) （おまえの心のかたくなさは）なんと、後家の幼い子にさえ及ばない。※主語を「おまえは」と補ってもよい。／「A不若B」＝AはBに及ばない、という比較の形
- (20) どうして（山が）平らにならないことがあるのか、いや、必ず平らになる。／反語。「必ず平らにできる」という愚公の確信

E 内容・記述

(21) 子孫は限りなく続くが山は高くない以上、いつかは必ず平らになるという愚公の理屈に筋が通っていたから。(五十一字) /ここが愚公の勝ち・智叟の負けを示す場面

(22) 山を削る人手は子孫へ限りなく続くが、山の高さは決して増えないという対比。(三十六字) /増えるもの／増えないもの、で並べて考える

(23) 「愚か」と名づけられた公が大事業をやりとげ、「賢い」と名づけられた叟はその見通しを持てず言い負かされる。世間でいう賢さと愚かさが逆転していることを示す皮肉。 /名前と中身が逆になっている

(24) 妻は土石の置き場を案じて計画を助けようとするが、智叟は愚公の愚かさをあざける。(三十九字) /同じ「できっこない」でも、片方は味方としての心配、片方はあざけり

F 文学史・故事

(25) 『列子』／湯問篇（とうもんへん）。 /道家（老荘）系の思想書

(26) 愚公移山（ぐこういざん） /たゆまず努力を続ければ、どんな大事業もやりとげられるということ。「愚公、山を移す」の形でも使う。 /天帝が神に命じて山を運び去らせる結末までが、この成語の由来

(27) 道家（老荘）の思想書。同じ系統に『老子』『莊子』がある。 /戦国時代の列禦寇（れつぎょこう）に仮託された書。今伝わる本文は後世にまとめられたとする説もある

【現代語訳（全文）】

太行山と王屋山の二つの山は、七百里四方もあり、高さは一万仞もある。もとは冀州の南、河陽の北にあった。北山に住む愚公という者は、年がもう九十になろうとしていた。（その）山に向かい合って暮らしていた。山が北をふさぎ、出入りが遠回りになることにこりごりして、家じゅうの者を集めて相談して言うには、「私とおまえたちとで力を出しきって、険しい山を平らにし、まっすぐ豫州の南へ通じ、漢水の南岸まで行き来できるようにしたい。よいだろうか。」と。みないつせいに賛成した。

ところが、その妻が疑問を申し出て言うには、「あなたの力では、（あの小さな）魁父の丘さえくずすことができません。太行山や王屋山をどうしようというのですか。それに、いったいどこに土や石を置くのですか。」と。人々が言うには、「それを渤海のはて、隠土の北に捨てよう。」と。こうして愚公は、子や孫のうち荷をかつげる者三人を引き連れ、石を打ちくだき土を掘り起こして、ちりとりとをもって渤海のはてへ運んだ。

河曲に住む智叟が、笑って愚公をやめさせようとして言うには、「ひどいものだなあ、おまえの愚かさは。残り少ない命と力では、山の毛一本さえこわすことができない。いったいその土や石をどうするとか、いや、どうにもできまい。」と。北山の愚公は長いため息をついて言うには、「おまえの心のかたくなさは、まったく見通しがきかない。なんと、後家の幼い子にさえ及ばない。たとえ私が死んでも、子が残っている。子はまた孫を生み、孫はまた子を生む。その子にもまた子があり、その子にもまた孫がある。子々孫々、つぎることはない。それなのに山は高さを増しはしない。どうして平らにならないことがあるのか、いや、必ず平らになる。」と。河曲の智叟は、答える手立てがなかった。

蛇をあやつる山の神がこれを聞き、愚公が掘るのをやめないことをおそれて、このことを天帝に申し上げた。天帝は愚公のひたむきな真心に心を動かされ、夸娥氏の二人の子に命じて二つの山を背負わせ、一つを朔の東に置き、もう一つを雍の南に置かせた。これ以後、冀州の南から漢水の南岸にかけて、行く手をさえぎる高い丘はなくなったのである。